

デザイン検討のアプローチとデザイン要素による基本的な方向性(案)

・「デザイン検討のアプローチ」と「長崎らしさを形づくるデザイン要素」の組み合わせによって、長崎駅周辺エリアのデザイン指針の基本的な方向性(案)を整理する。

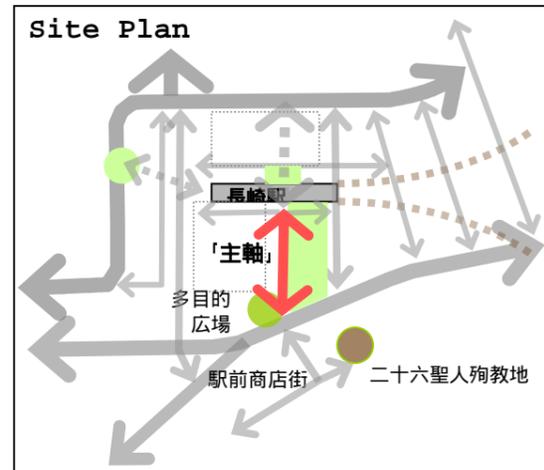
(長崎らしさを形づくるデザイン要素)	(デザイン検討のアプローチ)	
	1. エリア全体としての建築物や歩行空間デザイン等に関する一体性の確保	2. 駅舎及び歩行空間デザインに関する一体性の確保
土地の記憶	<ul style="list-style-type: none"> ・公共性の高い建築物等においては、長崎の地場の技術や素材等を積極的に取り入れることに努める。(例:造船のコンポジットパネル(キールトラス)等) ・建築物等は、稲佐山や二十六聖人殉教地等への眺望の配慮に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本エリアの歴史、履歴を出来る限り尊重することに努める。 ・水路跡等があれば、それらを現代の空間の中に積極的に活用し表現することに努める。 ・環長崎港地域アーバンデザインシステムが取り組んできた“地域の歴史や土地の記憶”を踏まえた上で、デザインを検討する。
光	<ul style="list-style-type: none"> ・昼間の眺望点からの屋上部の“見え方”には十分配慮する。 ・夜景においては、“主軸”の構成を大切に照明計画とする。また主要な建築物は、夜間に“闇”とならぬように夜景づくりへ積極的に参加・協力していくものとする。 ・公共的建築物等においては、夜景の“光の軸”を表現し形成するものとし、周辺の民間施設についても良好な夜景を構成するように協力を促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・“溜り空間”等への昼間の自然光の採り入れ方に配慮した歩行空間デザインとする。 ・安全に歩ける夜間照度を確保した照明機能の確保と夜景の情緒を感じさせる照明デザインとの両立を図る。 ・長崎駅周辺エリアとして街路照明(光源、色温度等)の統一を図る。 ・夜景視点場からの建築物等の“見られ方”に配慮した配置計画とする。特に長崎駅舎については、上部への光の“漏れ方”に十分にも配慮する。
水と緑	<ul style="list-style-type: none"> ・長崎港全体で、水辺に豊かな緑の軸を形成する“水辺のプロムナード”の連続性に配慮するとともに、視点場から眺望できる緑のネットワークづくりに努める。 ・緑の配置については、眺望点からの“見え方”にも十分配慮する。 ・「水辺」へ向けた通り沿道における複数の建築物(1F軒高さ、柱位置や庇等)の連続感を協調して創り出していくように努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・公共空間とセミパブリックスペースとが一体となって、歩行者が快適に歩ける“緑陰”を確保する。 ・樹種選定は、長崎の植生に十分配慮し、検討を行う。 ・港や浦上川の水辺に繋がる歩行動線・軸線を形成する。
風	<ul style="list-style-type: none"> ・空気の淀みが生じないように、浦上川や街路は、長崎湾からの空気の流れの誘導に努める。 ・「主軸」に面する建築物等においては、建物内に歩行空間を確保するように努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・長崎のすり鉢状の地形や卓越風を考慮し“風の通り”感じる歩行空間や溜り空間を意匠する。
色・素材・意匠	<ul style="list-style-type: none"> ・環長崎港地域アーバンデザインシステムのこれまでの取り組みを踏まえて、建築物等の色彩の検討を行う。 ・高層建築物については、色調や素材の分節化によって、ボリューム感を柔らげ、単調なものにならぬように誘導する。 ・公共性の高い建築物等においては、長崎の地場の技術や素材等を積極的に取り入れることに努める。(例:造船のコンポジットパネル(キールトラス)等) ・視点場からの眺望において、長崎港全体の景観と調和を図り、違和感のない配色を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・長崎の街になじむ素材(石・木・レンガ等)や地場産材の活用に努める。 ・セミパブリックスペースは、公共空間と一体的な空間を形成することをめざすものとする。具体的には、同一の舗装材を用いたり、植栽やベンチの配置等を工夫するなどして、歩行者が快適に歩いたり、休憩できる空間を形成する。

. デザイン指針(案)イメージ

- 1“主軸”となる空間デザイン・長崎駅東口駅前広場～多目的広場

《場の設定》

東口駅広、多目的広場(+駅舎、JRビル(アミュプラザ)、電停)



現在の駅前広場

《デザイン方針》

『歩行動線』

・ 駅と街を繋ぐ“主軸”として、多目的広場や電停までの空間を快適に歩くことができ、駅前商店街等への回遊性の向上を図るとともに、距離を感じさせない工夫を行う。

『セミパブリックスペース』

・ くつろげるスペースやウィンドウショッピング等ができる空間形成を誘導する。

《検討事項》

東口駅前広場:

・ 駅広レイアウトと歩行者主動線確保の協議・調整が早期に必要(第3回調整会議まで)。

多目的広場:

・ 市民イベント等の運営管理方法と使い勝手に関する設計協議、既存デッキ取扱い協議等が必要。

長崎駅舎:

・ 目的地及び背景としての存在感のある東口空間のデザイン誘導等の協議が必要。

JR 駅ビル(アミュプラザ):

・ JR 駅ビルが更新、新築されるまでの暫定的な改修(外壁、1F通路、ビル内通路、テナント、2Fデッキ等)による空間デザインと新駅ビル設計デザインの2段階の対応方針を整理する。

電停:

・ バリアフリー化へ向けた車動線、歩行者動線の整理と電停デザインの改善等が求められる。

デザイン指針(案)イメージ図

『光』

・ 夜間歩行の安全性確保と視点場からの眺望に配慮した夜間景観を創出する。

『緑』

・ 駅東口から多目的広場までは長崎の植生に配慮した樹種を選定し、緑陰を形成する。

『建築物等の意匠』

・ 駅東口を出ると、周りの建物は全体に一体感が感じられるように誘導する。



『素材』

・ 長崎の街になじむ素材や地場材を採用し、セットバック空間と一体性を持たせるように配慮する。

『歩行動線』

・ 駅東口コンコースからの“主軸”として豊かで魅力的な歩行空間を形成する。

『セミパブリックスペース』

・ くつろげるスペースやウィンドウショッピングができる空間を誘導する。

『建築物等の配置』

・ 建築物等には、出入りがしやすい建物内通路をしつらえることを誘導する。

- 2 “水辺へ向かう軸”となる空間デザイン・トランジットモール線沿道

《場の設定》

トランジットモール線から国道 202 号方向

デザイン方針》

『歩行動線』

・ 駅東側から浦上川への “水辺へ向かう軸” とする。

『セミパブリックスペース』

・ 2.0mのセットバック空間を活用し、ひと休みできるオープンカフェや緑豊かな歩行空間の創出等を誘導する。

《検討事項》

トランジットモール線:

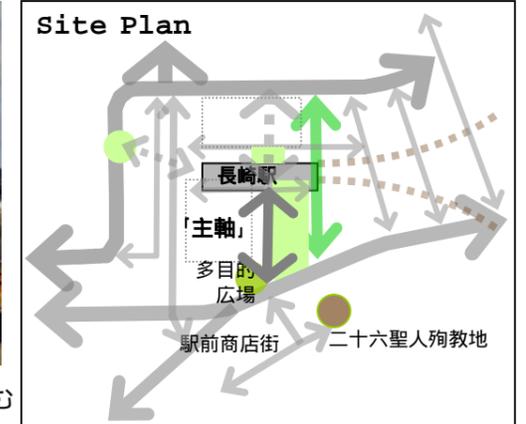
・ 駅広レイアウトと併せ当該街路を利用する交通量を推計する。

沿道建築物等

・ 水辺へ向かう軸線として、一体感を感じられるよう沿道建築物等を誘導する。



トランジットモール線計画位置から国道202号方向を臨む



デザイン指針(案)イメージ図

『建築物等の意匠』

・ 1F軒高や庇等を揃えることにより、街と水辺 (浦上川) を結びつけ “水辺へ向かう軸” を創りだす。

『色彩』

・ トランジットモール側の建物外壁の色は、昼光の反射に配慮した色調とする。

『緑』

・ 民有空間と街路とのダブル植栽を誘導する。



『素材』

・ 長崎になじむ素材や地場材を採用し、セットバック空間と一体性を持たせるように配慮する。

『セミパブリックスペース』 (全体 2.0m セットバックの場合)

・ セットバック部を人々が集い、憩える空間とし活用する。

『建築物等の意匠』

・ 1F軒高や庇等を揃えることにより、街と水辺 (浦上川) を結びつけ “水辺へ向かう軸” を創りだす。

『緑』

・ 俯瞰、遠景からも東西軸の位置や緑のネットワークが明確になるように配置する。
・ 長崎の植生に配慮した樹種を選定し、緑陰を形成する。

『風』

・ 風の通りを感じられる歩行空間が溜り区間を創出する。

『光』

・ 夏の昼の陽射しが反射しないように、北側建築物等を誘導する。



『素材』

・ 長崎になじむ素材や地場材を採用し、セットバック空間と一体性を持たせるように配慮する。

『歩行動線』

・ 駅舎内施設配置に配慮し、改札口からトランジットモール線への出入りをしやすくする建物内通路の誘導と東西駅前広場からの回遊動線を確保する。
・ トランジットモール線における公共交通の利用状況によっては、乗換え等がしやすい歩行動線の確保に配慮する

『セミパブリックスペース』 (1階部分のみ 2.0m セットバックの場合)

・ 通路越しのウィンドウショッピングができる空間を誘導する。

- 3 主要な眺望場所からの景観・夜景づくりへの貢献

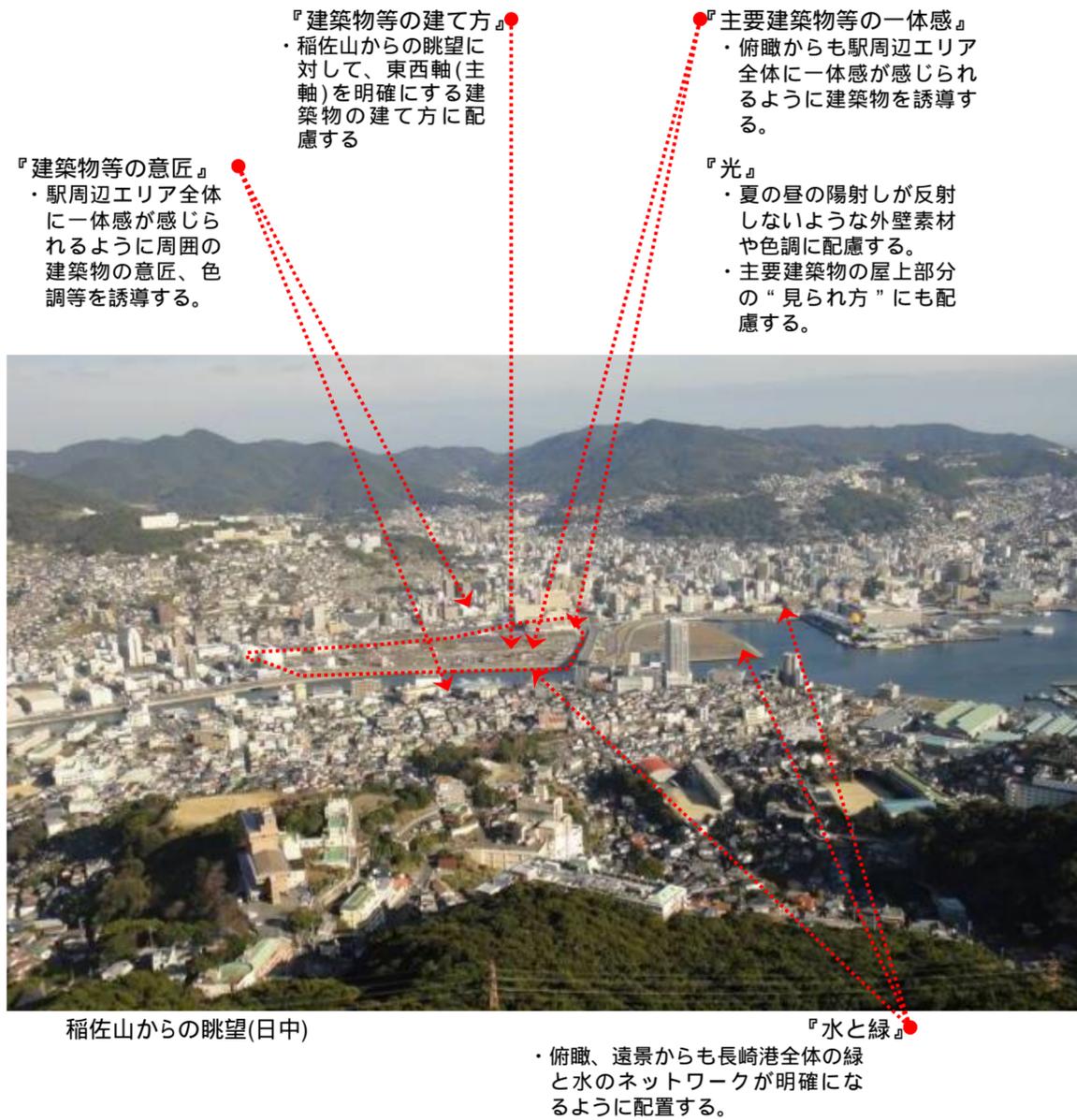
《場の設定》

稲佐山・視点場からの長崎駅周辺エリアの俯瞰

眺望場所からの“見られ方”への配慮

長崎駅は、市民にとっての生活拠点・故郷の心象風景であり、来訪者にとっては“長崎”に出逢う場でもある。長崎の街の新たなシンボル空間を創り出す上で、この土地固有の特長を活かした空間づくりを行っていくことが求められる。その一つのテーマが「視軸(眺望)」であり、「海」と「山」に囲まれたロケーションに対して、「見せたい場所」への眺望確保と周辺の眺望場所からの「見られ方」への配慮等を行っていくものとする。

デザイン指針(案)イメージ図



“夜景”づくりへの配慮

《代表的な夜景の眺望場所》・稲佐山からの夜景 / 鍋冠山公園からの夜景 / 立山地区からの夜景、等
・夜景の眺望場所からの眺めを意識した駅周辺地区全体としてのライトアップの検討
・観光シーズン等における主要施設のライトアップ、及び周辺民有空間の協力
・日常空間における「街路灯」「フットライト」等による駅前広場・多目的広場等の夜間安全性の確保と情緒的な夜景の演出

デザイン指針(案)イメージ図

